

(鹿児島郡十島村宝島浜坂)

位置と環境

宝島はトカラ列島の最南端に位置する594km²の珊瑚礁に囲まれた周囲が12.1kmの小島である。貝塚は船着き場から集落へ通ずる道路にそった集落の入口付近に位置している。この地点は隆起珊瑚礁上にあたり、海岸から二段目の標高約20mの段丘に立地している。

調査の経緯

昭和36年(1961)8月に三友国五郎・河口貞徳らが発掘調査をおこなった。

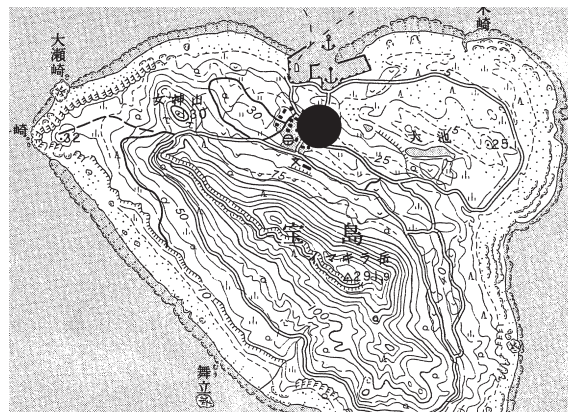
遺構と遺物

60cm×70cmの範囲にサンゴ礫が一重あるいは二重に並べられており、その中、周囲に焼土・木炭があることから炉跡と思われる。そのまわりに柱穴3基、3個の石の列があることから周囲を石で囲んだ住居跡とも考えられる。

地層は6層に分かれ、すべて包含層だが4層が混土貝層である。上層(2~4層)と下層(5・6層)の二文化層に分かれる。

上層からは紅褐色粗造の無文土器(宇宿上層式土器)を主とし、ほかに外耳土器3点、本土から移入された縄文時代晩期の土器12点、弥生時代中期の土器5点が出土している。無文土器は口縁部が肥厚、直口、あるいは突帯をつけた深鉢あるいは壺形の土器で、多くは丸底だが、小さい平底もある。外耳土器は直口の無文土器で、頸部に幅約60cmの三日月形把手が付いている。

縄文時代晩期の土器は口縁内外に沈線を有した赤色磨研土器(黒川式土器)、赤色沈線を施したX字状文土器、口縁部に刻目突帯のある土器がある。下層からは壺形で薄手の細線文土器が出土した。無文の土器に簡単な太い凹線を施したものと、有文土器である。有文土器は朝顔状に口縁部が開き、頸部がくびれる壺形の土器である。波状口縁をなし、刻目を有するものもある。胴部から口縁部まで、細線又はみみずばれ状の突帯を直線を用いて組み合わせ、これにけば状の細線を施している。土器の様相は南島



第1図 浜坂貝塚の位置

的であるが、胎土や焼成などに本土の土器をおもわせるものも若干見られる。石器は磨製石斧6・局部磨製石斧3・打製石斧1がある。磨製石斧は両側面を有するもので、うち片刃のものが2ある。局部磨製石斧は礫を割って刃をつけたもので、両刃のもの1、片刃のもの1である。他に叩き石も出ている。4層で夜光貝製さじ、イノシシの牙製垂飾、骨製かんざし、垂飾なども出土している。また、シャコガイ・夜光貝などの貝や、魚骨のほかに、イノシシの歯や多くのカメの骨も出土している。

おそらく、宝島は南島文化圏の北端で、本土文化圏との接触線上に位置するものとおもわれる。海岸砂丘にある大池遺跡において、南島の赤連式土器と本土の轟式土器とが共伴出土することも、このことを裏付けるものとおもわれる。

特徴

南西諸島と九州島の両文化圏の接触地にあり、両者の土器がある。

南島系の宇宿上層式土器が黒川式土器や弥生時代中期の土器と共伴している。

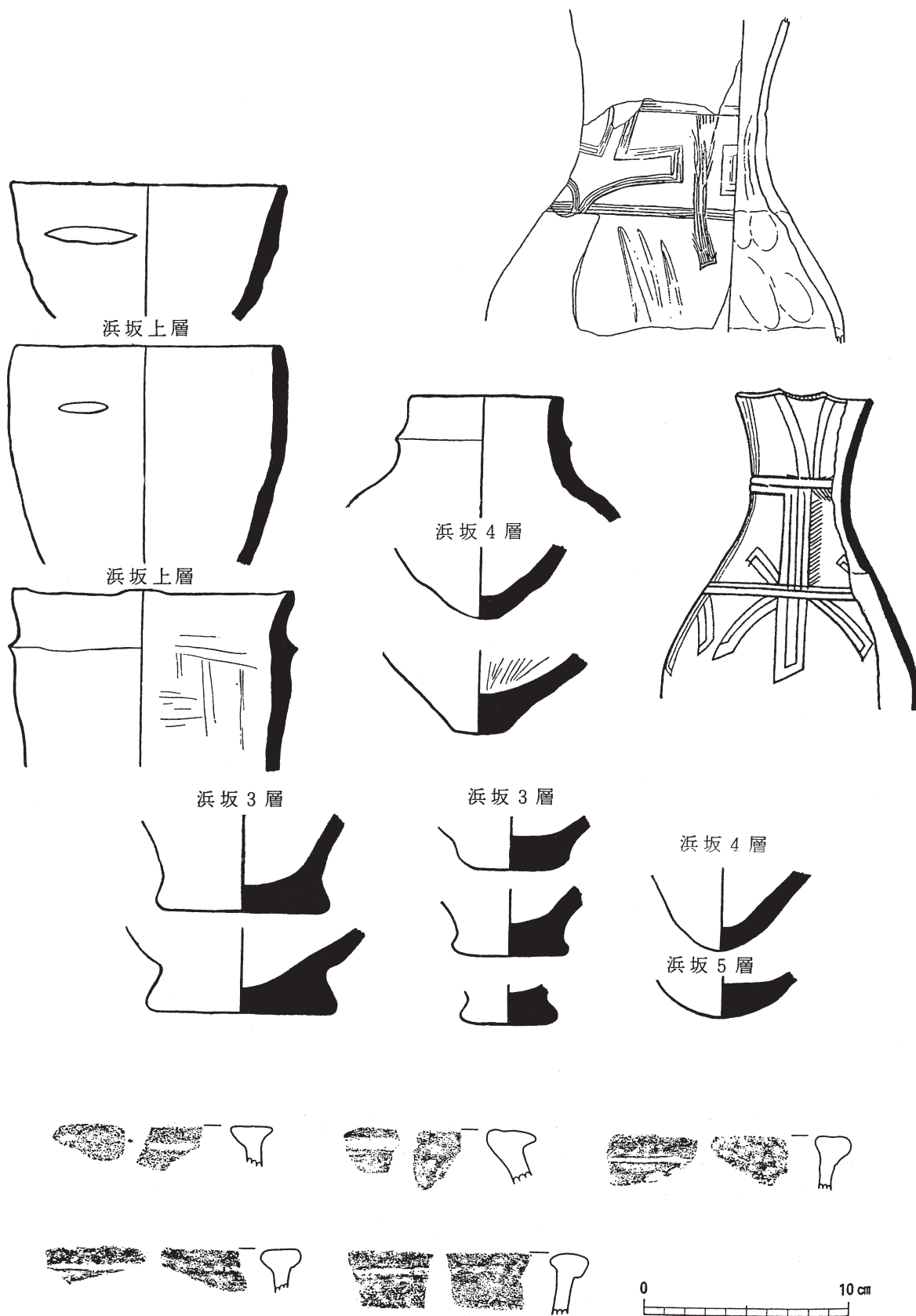
資料の所在

出土遺物は、河口貞徳宅に保管されている。

参考文献

三友国五郎・河口貞徳1962「宝島浜坂貝塚の調査概要」『埼玉大学紀要』第11号

(河口貞徳)



第2図 出土した土器